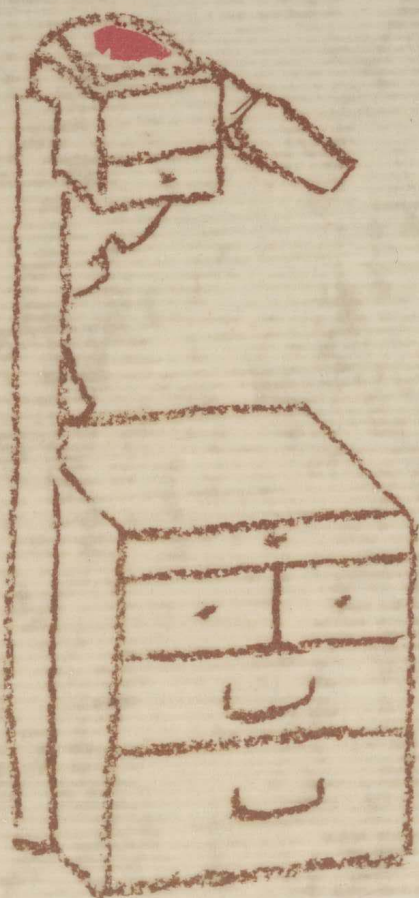


或一人の女の詰
宇野千代

中村貞以畫

或る一人の女の話 奥附

昭和四十七年二月五日 第一刷

昭和四十七年五月二十日 第二刷

著者 宇野千代

装幀插畫者 中村貞以

發行者 檜原雅春

發行所 株式會社文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三番地

郵便番號一〇二

電話東京二六五局一二一一

本文・插畫印刷 理想社印刷所

オフセット印刷 凸版印刷

製本 大口製本

製函 加藤製函

定價一千八百圓

© 1972 Chiyo Uno
Printed in Japan

萬一落丁・亂丁の場合は
お取替へいたします

0093-302240-7384

或る一人の女の話

裝幀・插畫
中村貞以

一枝の生れた家は、それほど大きな家ではない。佛間と座敷と店の間と、奥の納戸と時計の間と、それに玄關と庭を通つて、臺所と向う座敷とがあつた。その田舎の町では、それでも、案外、大きな家と思はれてゐたのかも知れない。家のぐるりは九尺の黒板塀で圍み、店の間には紅殻格子がはまつてゐた。なぜ、店の間と言つたのか分らない。一枝の家では、この店の間で、ものを賣つたりしたことはないが、さう呼ぶのが、この地方の習慣なのかも知れない。庭と言ふのも、この地方の言葉で、ほんたうの庭ではない。玄關から家の裏手へ抜ける通路のことで、一枝の家でも、玄關の土間の横手の扉をあけて、臺所を通り、向う座敷の前を抜けて、泉水のある庭へ出る、仄暗い通路であ

つた。そこから、風呂場と井戸は別棟の中にあつて、雨の降る日は、水汲みに行くのに、軒端づたひに行つた。井戸端から、馬ん駄屋と呼ばれる馬小屋の屋根が見える。その向うに、蜜柑畑と竹藪が続いてゐた。

いまから七十何年か前に、一枝はこの家に生れた。一枝はしかし、自分を生んだ母の顔をまるで知らない。娘の頃になつて、一枝が町を歩いてゐると、町の女たちが寄つて来て、「やれ、一枝さまの、お母^かに生寫しにおなりんされたことよのう、」とよく言つたから、たぶん、自分と似た顔をした女だつたらうと思ふ。どう言ふ譯か一枚の寫眞もない。一枝はしかし、この母を一度も懐しいと思つたことはない。また、母に早く死なれたことを、不仕合せだと思つたこともない。あんまり早く死に別れたので、母に對して、何の記憶もなかつたからかも知れない。家の中に、これは母の使つたものだとか、これは母の着たものだとか言ふものもなかつた。ただ、佛壇の中に、母の戒名と俗名を記

した位牌があるだけだつた。一枝が大きくなつてから、こんな話を聞かせたものがある。母が死ぬときに、一枝はやつと歩ける、と言ふ頃だつた。赤い提灯に灯をつけたのを持つて、母の寢てゐる蒲團のぐるりを、よちよちと歩いてゐた。「この子のことが氣にかかつてのう、」と言つて、母が泣いたと言ふのである。この話は少女小説のやうに聞える。しかし、一枝はその幼かつた自分のことを聞いても、悲しくはならない。この母の言葉をそのまま信じて、悲しくはならない。一枝の中で、母の姿は抽象體になつてゐて、生身の母とは思へないからである。

これは、だが、ついこの間、一枝が七十をとうに越したときのことである。或るとき、ものを考へてゐて、自分のこの生身が、この世に生れ出た不思議さに考へついたとき、ふいに、この姿も思ひ浮ばない、若かつた母に感謝する氣になつたことがあつた。よく、この私を生んでくれた、と思ひ、何と言ふのか、胸に湯のやうなあたたかいものの

流れるのを感じたものである。

一枝の一番最初の記憶は何であらうか。それはやつと一枝が歩けるやうになつてからのことか。座敷から見ると、ほんの三寸くらゐ、店の間の疊が低くなつてゐる。一枝は座敷の柱に掴まつて、じつと店の間の疊を見る。そして、片足をそつとずらして低い方へ下す。やがて、全身の重心を移して、もう片方の足も下す。下りられた。あの微かな危惧のまじつた歡喜の氣持を、一枝は忘れない。いまから七八年前のことであるが一枝は腰の骨を折つて手術したことがある。腰にギブスをはめて、不動の姿勢で、七ヶ月の間、仰臥してゐた。やつと骨がくつついてからのことである。兩脇を杖で支へて、疊の上を歩く訓練をしたが、七ヶ月の間、仰臥したままで歩かなかつたので、歩くとはどう言ふ風にするものなのか、その、足を互ひ違ひに進める動作が、どうしても思ひ出せない。いや、思ひ出せないのではない。分らなくなつたのである。「右足です。」と補導の人が言ふ。「今度は左足です。」とま

た言ふ。言はれるたびに、一枝はゆつくりとその足を出した。あ、これはあの、幼い子供のとき、店の間の疊の上へ下りて行くときの、あの狐疑逡巡の氣持と同じではなかつたか。この思ひが、稚い子供の頃につながる。

母が死んでから後、一枝はしばらくの間、高森にある父の生家へ預けられたと言ふ。高森の家は、一枝の家から四里ほど奥にある。奥と言ふのは、町ではない、山奥と言ふ意味かと思ふが、もの心ついてからも、一枝はたびたび、この高森の家へ行つた。四里の山道を車で行ったこともあり、馬の背に乗つて行つたこともあり、歩いて行つたこともある。峠の茶屋で休んだりして、だんだん山深く登つて行くのだけれど、高森まで行くと、俄かに廣い往還に出る。廣い往還の中に、小さな流れがあつて、その兩岸に柳の並木があり、道は並木のそとで二つに分れて、ちよつとした町の家が、兩方の道を挟んで並んでゐる。父の生家は、その町並の中ほどにあつた。

一枝はいまでも、その高森の廣い往還を思ひ出すたびに、なぜ、あの山奥に、ふいにあんなに美しい町並があつたのか、不思議に思ふ。父の生家があつたために、そのほんの一町ほどの町並が、さう言ふ形になつてゐたのかも知れない、と思ふのは、その家を特別のものと思ふ一枝の錯覺か。父の生家は、父祖代々の造り酒家であつた。太い格子の這入つた白壁が、どこまでも續いてゐる。店の軒には「吉野酒藏」と彫つた部厚い看板がかけてあつて、その下に、大きな、提灯のやうな蜂の巢があつた。

店さきには夥しい數の酒樽が積んであつた。その前に檜の厚い板があり、大小の枡がかけてある。酒を買ひに来る人たちの、小腰を屈めて這入つて来るのに對して、「賣つてやるぞよ、」とでも言ふやうな、一種横柄な態度で、番頭が酒をはかつてやる。その主客轉倒の風景が、家の格式を語つてゐるのか。店の奥の一段高くなつた疊の上に、父の兄、一枝の伯父が坐つてゐた。伯父は生れながらの足なえであつた。

夏も冬も炬燵をおいて坐つてゐたが、叱咤するのではない、一種、力のある聲で、店の采配を振つてゐた。

一枝はこの家の中で稚い頃を過したと言ふ。と言ふのは、一枝の中に、ここで過したと言ふ記憶がまるでないので、半年くらゐゐたのか、それとも三年くらゐもゐたのか、いまになると分らない。ただ、その家で暮してゐた間に、父の生家が、何か特別の家であつて、この家と繋がりのある自分まで、ただの小さな女の子ではなく、「吉野の姪」であると思ひ込んだものかと思ふ。

2

この一枝の思ひ込み方は、一種特別なものである。父の生家が、近在に聞えた素封家であつたとしても、何のことがあらう。ただ、いま

から七十四五年も昔には、凡ゆる人々が疑ひもなくさう思ひ込んでゐて、父の生家だけではなく、その分家の戸主である父をまで、特別のものとして遇してゐた。一枝はその中で育つた。

高森にゐる間のことで、ただ一つの話を開かされたことがある。一枝は體の弱い子であつた。便が何日も出なかつた。「いつでも、楊子のさきで、せせつて出したんぜよ。」と伯母が笑つて話した。この伯母は噂に高い美しい人であつた。足なえの伯父の妻であることを、誰も不思議には思はない。一枝はこの伯母の、世にも美しい笑顔を忘れることがない。一枝は娘になるまでの間、幾たび高森の家へ行つたか分らないが、そのいつのときにも、この伯母の笑顔よりほかの顔を見たことはなかつたから。

高森から歸ると、家には新しい母が來てゐた。いや、新しい母などと、一枝に思はれたらうか。一枝の記憶には、前の母とか新しい母とかの區別がない。自分の生母が死んでゐるのが分らない。新しい母は

この家の中にずっとゐたやうにしか思はれない。「お母^{かか}」と呼んでゐた。あとで年齢を數へると、母は十七のときに、父の後妻に來たことになる。一枝が四つのときに、弟の悟が生れた。七つのときに次ぎの弟の直が生れ、九つのときに妹のとも子が生れた。それから、十一のときに吉雄が、十四のときに秀雄が生れたのであるが、それらの弟妹たちに對して母のとつた態度と、一枝に對してとは、明らかに、或る違ひがあつた。「姉さまがお食べてから、」「姉さまがお這入りてから、」「姉さまがお出でてから、」といつても言つた。姉さまとは一枝のことで、何ごとも、一枝をさきにするのであつたが、このことに一枝が氣附いたのは、いつ頃のことであらう。この母は自分の生母ではない、と氣附いたとしても、しかし、それが一枝にとつて、何であらう。生母とは一體どう言ふものか、一枝は知らないからである。しかし、そのことは、ほんの僅かでも、一枝を不仕合せにしただらうか。極く自然に、一枝は自分の家族の間での自分の配置を悟つてゐた。そして、極く自

然に、その間で身を處してゐた。いや、處してゐたのではない。それが自分の置かれた位置だと言ふことを、何の苦慮もなく信じてゐたのである。そして、このままの母を愛したのであつた。

それについて、一枝はよく母から聞かされた話がある。母は十七で父の後妻になつた。この母がただの若い娘であつたのと反對に、父はその半生を放蕩無賴に過した四十男だつた。二人の間では、ことごと生活の明暗が違つてゐた。母は泣くことがあつた。或る夜更けに、最早やここにはゐられない、と思ひ、その生家へ逃げ歸つたことがあつた。母の生家は、父の家からほんの一里へだてた川下と言ふ村にあつた。ほんの一里しか離れてゐないところにゐて、父がどんな男か知らなかつたのであらうか。知つてゐるのはただ、父があゝ、高森の吉野と言ふ素封家の次男であると言ふことだけだつたらうか。しかし、いまから七十何年も昔の田舎では、そんなことは珍しいことではなかつた。「お母、お母」と呼んで、ゐなくなつた母の姿を追ふので、女中

の一人がもてあまして、川下の家まで一枝を背負つて行つたと言ふ。一枝の眼に、母を追うて泣いた自分の姿が見える。川下の家は竹藪の續いた堤の下にある。いまでも、竹藪のざわざわと鳴る音が聞える。一枝はこの竹藪のそばで泣いたのだと言ふ。「あのとき、一枝さんがわしを追うてお出でざつたら、この家には戻らざつたかも知れん。」母はさう言ふ。弟の悟が生れたのはその後だ。

しかし、母はその一枝を恨んでゐるのではなかつた。そのあとで、多くの弟妹たちを生んだ母は、ただ、自分のこの運命の組合せを、言葉にして見ただけのことであつた。母はその嬉しいとは言へなかつた生涯を充分に耐へ、或ひは甘受したかのやうに見えたから。この母と一枝とは、眞の母と子ではないままに、互ひに愛してゐたと思はれてゐたからだ。

父について、一枝はどんな記憶を持つてゐたか。一枝のものの心ついてからの記憶では、まづ、ことごと馬の足を打ちつける音を、夜と

なく晝となく聞いたと思ふのに、家の裏にある馬ん駄屋の藁屋根は崩れ落ちさうになつてゐて、その中に馬のゐたと言ふ記憶がない。しかし、父は馬を何頭も飼つてゐたと言ふ。店の間の奥の、暗い納戸の押入の中で、或るとき一枝は、夥しい數の競馬の目録を見たことがある。宛名はどれも、父になつてゐた。自分の馬を父は競馬に出してゐたのか。では、どうしてそれをやめたのか。不思議なことであるが、この家では、父についてもものを問うたりする習慣はなかつた。一枝の記憶では、父のことを、母にさへ訊いたことがなかつた。父について、何か知らうなどと思つたことがあつたか。それは、雨か雪か、明日の天氣のことを人に訊かない農夫の心に似てゐたか。

一枝の記憶の中の父は、いつでも、時計の間に坐つてゐた。時計の間から、庭の泉水が見える。泉水には大きな鯉がゐた。その向うの蜜柑畑には、蜜柑だけでなく、種々の柑橘類が植ゑてある。葡萄の棚もある。時計の間からは、家の外も中も凡てが見える。父はそこで、唇